俳諧京[illegible][illegible]集

へ 5
6496

祖翁の風徳あまねく吹わたりて来麦程
むかし蛙飛込(?)鯉の蝦蟆の縁まで
口ずさまぬはなかりし中にも別て
大津代々来川ひ(?)其ぬ為かりし今やはし
まへ(?)為出しては那かよりに数備して吟讀を
のこしかひぬし道遥の地は此子ときあり
佳境其制す源首いしふをと建彩堂

陽春廬蔵文庫
杉氏蔵書
へ5
6496
010186021830

遠ざかること世風を忘れし一世遺徳残る翁年に
まつ時雨降るはの頃をひよりおのが志し
追薦の会式執行ひ手向の句をし
集めてくさの数あるは冊子様に綴りていく
たくさまて文車にこそあまの編をとるみ
古人の事を録すといへども殊の外猶なし
まかりし蕉翁没百五十年過ぐることもむかし

乃ち年たる人の志比を抜句てなんまれなきを
中にも飛さも此の外遠ざかるとも句に聞く子
も能く拾しもあまたあれとも素堂も祖流を続く
子似られし何某さらのいやつ様へてもあらん
まつ句のみには吾が身沖老人雅は句子追悼の此
遠忌に値することはいま乃ちは句かひありとそよ綴
とひのあはれ秋のたふうたも思ひ出る粟津の

祖業に請て伊賀は庭訓を学ひたる
抜八翁のちからを得たる学文をたつて手絶えたる
ふたつあるなかの教式も地中へとなるに詠
論生まかせしに根のつゐに終にいまさ由あるを論て
尚一行に堪る人筋力遠さけまし謀東取る
寒稿るに活生を設け正当の大府に陸
しるものを集へ契れ計なくも遺功に根據げ搏て

御霊に家かひ来る者は生砂のつゐに擬ち
わからかなる捺玉に暇清計あるひとしきをかす
あ施をいまだかつしときよ母値ある者寡
直指は志を蒙るおもひをなしく名おもき唯
以やまひて流るなき意義及人を合るい流を
名ミて源頭のきを正す論す道に
仝事一まち致尨く遠なりしむ

皆是吾師乃聯恩報徳乃志にて
経営する程に愚意不乗撰て
しるす白兎

天保十四癸年初十月十五日

宮城縣圖書

新佛の精もちの小篝地ほとりをかたり
境は土手も無き橘の冬枯　卓池

支梁亭

口切に境の庭をつくりしき
落の枝葉をたる瀧水音　規外

桃人も古田の駅ふ出けり
うきも積て人稀麻に茶のましき
野に納豆を干しける里　蓬宇
浩成溝渕の中の秋海棠
や鉢しへ寄る秋楼店　惟一
葛の葉遊掛て見せけり秋の霧
翰のうけて居る秋奥門　碧山
三妙新撰蒼浪権實完
京にあきて此ら所に四方の往来
火ともりちやき竈出しの炭　完伍

鐘盡に小坊主集ふや大根引
娘うし抛し越十月の空　宜彦

いさ庭は雪見に積む雲まて
軒の炭様へ手州も埋火　朱若

莉添や抱に給ふ蕎麦の豊
秋明の屁れ雑につめてき　清皐

旅宿

志ちせ襟て手拭ける寒さ哉
春よりつゝふ蝶の志つゝま　石采

夫講頭壹に襟名を出す

煉ルにまつとのまし新墾　東平

留主の間にあまてる神の言葉

きや暇のききに出木花のちまき　携丘

出羽に旅鞍して

埋火や墨にハ雲の報法

心にかゝる窓に掛けし簑　猪水

冬籠又よりをりん出はつら

露衣に鞁のめくつあまり　青可

三河の鳳来寺に詣ける時の
ほとり例の病おこりて甚しく
宿に一夜を明しけれ

秋風にひとへの身をしほりて旅寝哉

こ枕にすまゐハと痛む病　塞馬

往つゝも旅のこゝろや置巨燵

旅寝も思ひけしつゝの木枯　洗竹

自画自讃

いとうめしきことや竹の桧笠

旅をも忘れて手折る山桜　東石

淡にもまた見とれり浅葱越

梢のすゑまたちるの花旅縁　五蓼

面白し雪にやならん冬の雨

椿の家西向に戦の扉　圭布

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

きゝし状出しも咲ゝ無大君　三岳

三州保美といふ處にて

梅椿早咲ほめん保美の里

日数延ての旅衣の跡か　相古

杜國か墓に詣て

麦生てよき隠家や畠村

布子着替し肩のさつき　筌露

伊良古崎ハ其海の果まて
鷹のはしめて渡る所とや
いまに鷹なとなにもよあると
思ハ杉あまれ称る折ふし

鷹はいま見ても嬉しいらこ崎

砂のうちに城かする雉焼　波文

葱白く洗ひたてたる寒さ哉

背戸に明りの残る冬の日　貞山

天津縄手

きくこ坊や高上に和る新法師

浪吹あまる岸のこの葉し　茶園

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき
よし野とて見ても宿の照
古き世を君の比く
梧容

雲の峰なでしこ咲る空掃ふ
きすはゞや懐手見ゆる蕎麦搔
水竹

鶯の声まるきれ人来
かしけて花のなき猫撫
嵐牛

旅人を見送
高秋さへ深る霊のあとの郷
沢年是のつきし山深
蘭所

隠岐より佐渡の海越に飛なり
月明細り夜来續けり　六蝉

笹葉や粉糖のうち知他端
まして降る雪てかゝる嘯　杜水

霜の根や葉さへ出して鳴千鳥
船くる旅達もあり　為中

三條なる知己宗蕪に隠れは
舊友門人日々きたりす
いつもかはらぬ達人
まかりし形りてや雪の枯尾花
稀に居りも舊き媚し　呉雪

節季候すゝめの宿ふ出立哉

浮迄ハ音宿市の媚酒　蘇雲

まし隙しく見しや浮世の煤拂

雪ふらぬ日ハ笠の淋しき　一應

あら何ともな明日ハ過て飯ゟ汁

霜中けこのゆきゝ節分の豆　青坡

猿曳形つて手の翁ゟ猿ハ

手そよ笠きゝて雑をきたなめに

扱て鎌つく茸の如くなり　稲居

摂五

きりきりす秋も静に
幻きや何處の産
卓池

宵月や川まで下る戸の流れより　スルガ 碧山

流れ来る芭蕉葉ゆかし色て深し　南輝

久かたの星見ても知らん枇杷の花　仙壺

遠み日に動き出して枯尾花　高峯

冬ても隠や東山のもへ込　青雀

何ほどまで積つゝや散る紅葉　伯耳

落ちかゝる眺の清く木の葉哉　抱布

寒念の遠くなりて納豆汁　鶯暁

画見へ入る寒声や紙子售　守唇

庭にまで大根釣りし思の家　子恰

十月や砂崩れたる蟹の穴　幸彦

見えかねて越ゆる峠や雪しまき　尚古

水寒しなりゆき海原や紙時雨　其篤

こさむさや門に忘れし洗ひ鍬　一晁

蜂の巣の朽てなるや冬木立　朴山

散りし深や咲かけてちる紅葉　麗々

木からしや満汐よする西なのり　竹友

新藁ひしろしも世来て初時雨　其笠

牛ほけて庭に拂ふ粉雪哉　樗舟

鱸幽けて時雨見送る縄手哉　里桂

薮主な咲かる知る冬椿　芳山

鎮て峠ちるやまさひとり　嵐牛

拾てのうもちもして燃る榾哉　清皐

池に月見てもありや枯尾花　栗谷

横に拾ふ物なきも火かな　其嵐

戸口まで時雨や小春の日の隈り　竹里

白雲へ落る日のさし小春かな　秀波

折まがる木も持たし家あし堂の菴　杜水

苔紫や小鳥の糞は残り　梧容

この夕枝を拾ひ今もなし神の留主　自蓮

志つとして掃るゝ霜の露の朝　夷白

淋しさになるゝいつわや抑とりこし　知来

雲のうへ八嶋し無寒気や玉霰　五水

枯く錦の床しき尾花哉　五岳

かつ居し大手の風や冬の月　貞山

日の入て淋の明りやこのま尾花　為中

空室や親子して来る仕立かな　猪水

冬枯見るゝ水たしなやきくの水　畊舎

なる都の年に雪積笠家哉　東平

有なしに流轉水や石藤の花　筌露

汲ましき水に気の遠き寒さ哉　蟬禾
此比の古水を澄まし汲る朝　青芙
掛りけり家先々や雪の石　氷清
寒さ也鈍き冷まるるか手桶　両八
このむし枝蓑に掛て帰る　シナノ圭布
新宅へ稀に来や子供ら　武粟
寒きり日や遠船を見向きる舩　擢平
座敷の火消て寒し屋敷　文船女

日の影乃動く際つゝし船の雲　魁甫
人並にさらさら帰り手の暮　几亭
船着のして行きてる船師走かな　亜橋
寒からしく掛ふて八吹炭や哉　青坡
山吹と見えし中枯れり瀧の水　布青
瀬に舟乗つなし冬の月　鳴露
蓑のむらさ之ころで鉢引　ヲハリ雨篁
林入まる茶に木の葉の寄りけり　楚江

山風を笑度ゝやむしき炭　巴南
志ら雪や筧ハ越る跡茂　文来
しら鷺や鍬に雪ちる藪構　青白
雪の屋に来て黄ひし枝の形　其青
しら雪や海の夕日かけ川に　宜彦
鐘の音は中に深きる小鴨の声　文之
花咲の桂似合はし小百姓　一武
船の灯を打ても橋越十枚か　イセ 流芳
雪降りて生く清のうる雪の雪　霞汀
鳴きゝ風雪の跡より夕しされ　探齋
冬ふの日もむかふ舟に出枯尾花　昌風
山茶花や日南へ押ゝ尺冷じ　雀渚
伐のこる山より走る鴉哉　是誠
拍子へ度ゝ舟や三枝さて内　岐蝶
跡先よ続く雪越し船哉　都岐雄
山道のいつくは見え来立　笑ゝ

冬葉の一人に寒る匂ひかな　奥州 一止

志ぐるゝや牛も寒がし角　イヨ 烏岬

枯荻のつく河原や秋時雨　京 松朧

こもりし床も寒きる門や冬の月　伊勢 呉雪

鶏啼てうらさ静る寒き肥の事　江戸 流芝

唐子の火鉢月に照る名霜較哉　、雪巣

枯枝のうしもや寒まこのしらば　塞馬

時雨行いとゞ住しき月経不る　壺仙

山の端ふ月ハ一のまゝてまつしらま　洗竹

蝿見の冬り咲立しきまこの非　可月

蔵のて出て無船の時雨の秋　渓水

火おりの岩しし竈や冬の蝿　薫耶

出ぬくまし寒林離まつ有る時雨　一葉

船より数ハ早集寂中や京時雨　之麦

桃さく寺となりふあるまつり　宜春

鶯に老といふ菜を飲させらん　佳暁

山伏の薬ぐすりつゝしや春の入　霞竹

朝に見る山の高さや冬木立　青李

静なる百姓家やとしの暮　浦箏

夕霧や岸に流の思ひさし紅　冬月

なりふりの梅見ひきるしかね哉　青可

枯芦や筏にかゝりし浜荻　翠錦

茶でもてなす冬の牡丹哉　錦水

鷺一羽波塘を横ぎる時雨哉　里敬

船まちの旅人やとしの暮　笑價

俤の木のなかりはかなき落葉哉　柰中

かし寝て誠にかすり野の夢　茂翠

人の家ことならぬありり冬の幟　星水

晴れ鐘りたてり報恩講　畝曲

氷こしの秋柱寄藁やちよしか　露麦

船にのりて棹見ゆる小春かな　鷲嶺
あらしてけふのまつ茸時雨かな　葵村
それ程ハ来つゝ枯る芒かな　鶴齋
山ぎりの家ハ売持やおもしろし　霞蒿
傍船へ生理平乗合きむき哉　狸玉
そよぎて鴫ハこのミ見て落る木の葉　溪橋
西の空更し明ふこえて鐘氷る　俚仙
みる公の菜こしらへや欅なり　春貫

雪の原ゆきゝけふり戲車　美道
風おもしろく咲そゝ花の隠かな　鳳岱
日ふこう梅まよふも時雨かな　士兼
水鳥や立ても猶画咲もなし　鵞洞
港にけふはいへも春時雨かな　禾考
沖晴て冬もりく枯る芒哉　風苔
体この木の葉まる消て枯尾花　其英
咲しえて出まゝつり和也冬牡丹　杏雨

並ゝ秋の境を崩し志賀の浦　携丘
なげらる菜うし湯気や氷室　如昇
新綿のしとね軽さや竹の雲　市井
咲まれて穂くきの流し枯尾花　碓月
晴澄の峯ゝ無月梢や啼す鳥　薄水
聖堂にもつゐて一咲さく梅　稲居
風よけの柏にかゝる岩見草　守鴎
煤はらひて延る日をしる増花　鴉石

曲りくし舩の乗りや冬の川　藕雲
店一ッあやは披露や夷講　技墨
ふきゝ船のす雨や去るを沖照り　霞村
山茶花や手に射らる来る篠の赤　杜鵑
よんりさん狐の穴や枯むらう　柿菴
枯もてし屋茶に茶るや汐の浅　笳月
然りまての坑禁へたる時雨　禾月
鴫翔つ寺月に白し冬木立　仙菓

細くれとまかは思ひや雪の山　一栖

見えけより出ぬ日のまた枯野外　机民

云ゝ拂ふ鳥出てうつや豆まきこ　風樂

枝の明くうら年迎ふ出る千鳥かな　拓二

序押ふ志き見て汐や瀬のまさ　陽坡

半ゝ由まる陰年枯る尾花華　一松

日のあたる錦ふたけしう来す紅葉　松子

ゆるさんふちきれ信ひや冬の月　琴松

明星の月出て見へて枯尾花　丈轉

まつとしらん宿の月なりかへり咲　左蓼

枝のうちふ志をれさゝめや華の松　梅史

雪の日やうけて淋しき屋敷町　棟甫

枯ゝ葉也出ゝ見てもやまでゝ華　蒼尾

三楼ふゑや始終ゆかれ紀勢ふ　凉花

雨風しき枝由きの香る波濤の雲　可研

池越千篠明く音や冬の月　完伍

日のさして岩かねにかゝる落葉哉　蚊文

霜に星出て来て枯尾花　水竹

落付て又一しきり渡り鷺　蓬宇

起〻に至る腐なつふ足〻の鴨　玉養

山風や松倒れし瀧の氷　芍美

日の川は中断まて此星底　三岳

無粒やしるしさゝ䑓なし　紫霄

来磨忌や捕切たる松の甍　吹角

ひと雨や飛ゝにかゝる岸氷　雀町

慈むしや時くたむ女実り　几藤

坊くに掃寄せられ落葉哉　雪斗

凧とのく松は見ぬしにれ時雨　規外

肴狸る忍らて落葉の底　守山

こもり文しれる池の端　可松

霜凍や且埼たる紅あり　風栗

鶴藁に雀こも時雨　梅府

更る程や人の軒に木兎の声　朱芳

こからしや岸に通ふ勝手道　嵐袋

ましき餅に投入掃せたり庭の雪　柿青

鷹きたらくかをあたら隠し無の音　荷堂

雪車吹や家出るになる殿の跡　東石

家並乃竈明りや冬木立　秋橋

落葉せる梢に見るや木兎の影　五陸

山よりも落葉の下を流れ星　六蝉

流れ水の凍る渺先可南　一應

掛けより継ぬの多し雪の山　傈車

初雪とゆまでふハ降りなり　汝篁

一霜に染てをけ哉沸るの跡　旭甫

横雲や風ふきまてまく拂　潮花

降るつよこの夕ぐれの山川晴る　波文

風止みハ枯蘆も果て染まり　二青

枯尾花濡らし茎の根しらす雪　五蓼

河氷に鴫立影や枯尾花　相古

いかなり時雨に染る路芝　行未

見定の法の跡なりや冬の海　柳月

時雨る日冬の空見る冬の入　一秀

冬されや山にかゝりて一ト路　梅二

こぼれ落葉兎の糞や木の葉の霜　石水

川そひや鶉も沈み出来　里衡

燃へりて草叢の乱る霜柱　兎影

雪風やこの頃残る秋の船　鋏平

浮き穂もところ〳〵に枯る芒哉　石采

志つかれハ霜の陰なり枯尾花　茶岡

晴てに寒き一と冬のしら芝かな　惟一

明ける星移ろふや嶺哉　淵月

霜枯ゝ草の根を取る雉子哉　卓池

追加

月の出も翁して拝ぬくゝ　吉田 嶌尚

蕎麦白きりはすゝきや枯野原　ヲハリ 胄兮

莚たゝの唐穂もはなし時雨　まに 三圭

湊立て水も見えぬ瀬のうへ、　ゑつき

時雨や牛まで見の一しゆるゝ、　吟風

冬鳥えて風のつれなや鴨の声　シナノ 助水

朝露ておもの、いたゝく以霜哉、　吾牛

日和さして格も白し雪の山、　芳齋

もの寂や向ふしこゝろ白の月、　月哮

人のまゝ行ゆきて枯野かな、　李塘

鶏の餌にもふねのつくや初時雨、　墨芳

水鳥や下にはゆきし枯尾花、　李明

落ちる浮き池の水あはれ、　梧芳

梅の花一つほつして初時雨、　栗人

入まその日あしもとに時雨かな、　雪嚢

四二九〇、

大楠をも又陰にたのしみぬる、其逸
ふつとも妖し縄の身や縄の重、之聲

弘化乙巳秋上梓

富田藏書